

I ヨハネ書における定型句表現

三浦 望 rscj

The Role of Rhetorical Formulas in 1 John

Nozomi Miura, rscj

Abstract

1 John uses various types of rhetorical devices. While pinning down the logical and linear progress of the argument is too elusive in this Epistle, the rhetorical devices appear to be arranged to articulate the main points of the themes that come to the fore repeatedly. This chapter focuses on the four rhetorical formulas in 1 John—(1) the ἐὰν εἴπωμεν ὅτι formula with its variations, (2) the πᾶς formula, (3) the ἐν τούτῳ formula, and (4) the αὕτη ἐστίν formula. The repetition of the rhetorical formulas in 1 John emphasizes the main theological points and recapitulates them in a particular section. As highlighting rhetorical devices, the repetition of these formulas has a strong persuasive and performative force.

1. 序

ヨハネ書簡研究に関しては、その起源や背景、書簡のコンテキスト等について議論が続いており、「定説」もしくはコンセンサスとして確定した部分が少ない。I ヨハネ書についても、手紙のジャンル、構造・構成、執筆目的など⁽¹⁾、多くの面で研究者の意見は多様にわかれている。I ヨハネ書の執筆目的についても、これまで「論争的解釈」(polemical reading) が支配的であったが、近年の「非論争的解釈」(non-polemical reading) がこれを補完・補正する方向に動いている⁽²⁾。

I ヨハネ書には、確かに「論争的箇所」(I ヨハ 2:18-19 および 4:1-6) があり、研究者の間でもコンセンサスがある。いずれも、「反キリスト」(ἀντιχριστος, 2:18 [x2], 22; 4:3; II ヨハ 7)・「偽預言者」(ψευδοπροφήτες, 4:1)・「惑わす霊」(to; πνεῦμα πλανῆς, 4:6) などと呼ばれる「論敵」もしくは「対立者」について述べており⁽³⁾、書簡の著者が何らかの対立・抗争を念頭に置いていると考えられる。これらのテキスト箇所では、キリスト論が主要な問題となっており⁽⁴⁾、I ヨハネ書の著者と論敵とは、キリスト論に関して対立していたと想定できる⁽⁵⁾。しかし、これらの僅かな論争箇所を除くと、手紙の大部分は、倫理的勧告・奨励を行う「パレネーシス」(paraenesis) で構成されている⁽⁶⁾。1900年代初頭頃まで、英独の研究者たちは、I ヨハネ書の分析を、基本的に倫理的勧告と教義的(キリスト論的)論争箇所とに区分しており、この解釈は基本的にドイツ語圏の研究者に受け継がれている⁽⁷⁾。実際、Strecker は、序文(I ヨハ 1:1-4)を除くI ヨハネ書の構成を、「パレネーシス(パレネーゼ)」(Paraenesis [Paränese], 1:5-2:17; 2:28-3:24; 4:7-5:4a; 5:13-21)と「教義的議論」(Dogmatic exposition, 2:18-27; 4:1-6; 5:4b-12)に区分し、手紙の大部分は倫理的勧告・奨励の「パレネーゼ」であり、論争的箇所は「教義的議論」であると解釈している⁽⁸⁾。Schnackenburg も、I ヨハネ書には「多くのパレネーゼ的部分が含まれている」とし、I ヨハ 2:15-17; 3:11-21; 4:7-12 および 4:19-5:3 を「パレネーゼ」

として提示している⁽⁹⁾。Stowersも、IおよびIIヨハネ書を「パレネーシス書簡」(Paraenetic Letters)と見做し⁽¹⁰⁾、他にも、Iヨハネ書の手紙を「パレネーゼ」として解釈する研究者に、Klauck、Luz、Perkins、Rensbergerなどがある⁽¹¹⁾。

レトリック批評 (rhetorical criticism) によるIヨハネ書の分析では⁽¹²⁾、手紙の奨励・勧告 (パレネーゼ) におけるレトリック用法に焦点が充てられている。かつて、編集史批評では、「論争的な手紙」(polemical letter) としてIヨハネ書の解釈を行う傾向が強かったのに対して、レトリック批評では、むしろパレネーゼ的要素と、そこで用いられているレトリック分析に焦点が置かれるようになったとも言えよう。レトリック批評による研究が改めて浮き彫りにしているのは、Iヨハネ書の大部分が「倫理的奨励・勧告」によって構成されているということであり、また、著者は自らの共同体に対して奨励・勧告を効果的に促すために、独特のレトリック装置を駆使しているということである。

「独特の」という表現の意味は、それがIヨハネ書の特徴的なスタイルとなっているためである。新約聖書の書簡で、典型的な「パレネーゼの手紙」というと、Iテサロニケ、牧会書簡 (I・IIテモテ、テトス)、ヘブライ書、Iペトロ書、ヤコブ書などが挙げられるが⁽¹³⁾、Iヨハネ書はこれらとは多少異なる独自路線を行く⁽¹⁴⁾。しかし、十二族長の遺訓など、ユダヤ教遺訓文学は典型的なパレネーゼの「場」(locus/topos) であり、ヨハネ福音書の「告別説教」(ヨハ13-17) は、この遺訓文学を受け継ぐテキスト箇所でもある⁽¹⁵⁾。Iヨハネ書と「告別説教」が類似していることは、多くの研究者が指摘しており⁽¹⁶⁾、こうした影響下にあるIヨハネ書が「パレネーゼ」的要素を含むことも理解できる。

さて、Iヨハネ書は、特徴的なレトリック用法を駆使している面がある。それは、「形式」という点で異彩を放つ。Iヨハネ書では、明らかに賛歌形式を含む「序文 (Prologue)」(1:1-4)、「並行法的頓呼法 (parallel apostrophes)」(2:12-14)、「愛の賛歌」として知られる「賛歌形式 (hymn structure)」の叙述 (4:7-10)、エピローグにおける「わたしたちは知っている」(οἶδαμεν ὅτι) という句の繰り返し (5:18, 19, 20) など、多様なレトリック用法 (スタイル) が駆使されている。その中でも特に、型通りの表現方法——「定型句表現」(formulaic

rhetorical devices) ——を繰り返すレトリック用法が多く用いられている。同じ定型句表現が、語句を変えては手紙の中で何度も繰り返されている。前述の賛歌や頓呼法を含め、「形式」において特徴的なレトリック用法は、実にIヨハネ書の約60%を占めている。本発表では、この「定型句表現」に焦点を充て、Iヨハネ書において、このレトリック用法がどのように用いられ、どのように機能し、どのような効果をもたらしているかを見る。

2. Iヨハネ書の構造、およびその特徴的なレトリック用法

Iヨハネ書は、類似した文章表現による繰り返しが多いと言われる。その特徴的な論述スタイルでは、限られた語彙を駆使して（その割に *hapax legomenon* が多い）、同じ語句やテーマを冗長に繰り返し、論点やテーマを少しずつずらし、異なる視点で何度も同じテーマに振り戻りながら先に進めるという——いわば、「螺旋的」、あるいは「周期運動的」な——スタイルとなっている⁽¹⁷⁾。この繰り返しにおいて、「定型句表現」が頻繁に用いられている。今回取り上げる「定型句表現」は、以下の通りである（表1参照）。後述の通り、過去の研究において、1および3は、まったく別の視点から取り挙げられてきたものでもある。

表1 ヨハネの手紙における定型句表現

| | | Iヨハ | IIヨハ | IIIヨハ |
|---|--|---|------|-------|
| 1 | 「もしわたしたちが～と言うならば」 (ἐὰν εἴπωμεν ὅτι) | 1:6, 8, 10 | | |
| | 「もし誰かが～と言うならば」 (ἐὰν τις εἴπῃ ὅτι) | 4:20 | | |
| | 「～と言う者は」 (ὁ λέγων ὅτι) | 2:4, 6, 9 | 11 | |
| 2 | 「～する者は皆」(πᾶς ὁ + pres. ptc ...) | 2:23, 29; 3:3, 4, 6 [x2], 9, 10, 15; 4:7; 5:1, 4 | 9 | |
| 3 | 「これによって、わたしたちは)～ということがわかる」 (ἐν τούτῳ γινώσκομεν ὅτι...) | 2:3, 5c; 3:10, 16, 19, 24; 4:2, 6, 9, 10, 13, 17; 5:2 | | |
| 4 | 「これこそ～である」 (οὗτός ἐστιν / καὶ αὕτη ἐστίν) | 1:5; 2:25; 3:11, 23; 5:3, 4, (6), 9, 11, 14, (20) | 6, 7 | |

これらの「定型句表現」がIヨハネ書の中でどのように配置されているかをまとめると、表2の通りとなる⁽¹⁸⁾。表2が示す通り、著者はある種の定型句表現を、特定の箇所集中して用いる傾向がある。以下では、それぞれの定型句表現の用法について説明する。(本論考では、「形式」に焦点を充てて説明する。)

表2 Iヨハネ書の定型句表現

| | | "We, You, They" rhetorics by Lieu | If we say formula | πᾶς formula | ἐν τούτῳ γινώσκομεν ὅτι formula | αὕτη ἐστὶν formula |
|--|-----------|---|---|---|---------------------------------------|-----------------------|
| 序文 (1Jn 1:1-4) | | 1Jn 1:1-4 | | | | |
| The First Division (1:5-2:17) | 1:5-10 | | ἐάν εἴπωμεν ὅτι 1:6, 8, 10 (Cf. 1:7) | | | 1:5 |
| | 2:1-6 | | ὁ λέγων ὅτι 2:4, 6, 9 (Cf. 2:5, 10, 11) | | ① ἐν τούτῳ formula 2:3, 5c | |
| | 2:7-17 | | | | | |
| The Second Division (2:18-3:24) | 2:18-27 | 2:18-19 | | | οἶδα phrase | 2:25 |
| | 2:28-3:18 | | | ① πᾶς formula 2:23, 29: 3:3, 4, 6 [x2], 3:7, 8, 9, 10 [x2], 15 | ② ἐν τούτῳ formula 3:10, 16 | 3:11 |
| | 3:19-3:24 | | | | 3:19, 24 | 3:23 |
| The Third Division (4:1-5:12) | 4:1-6 | 4:1-6 | | 4:7 | ③ ἐν τούτῳ formula 4:2, 6 | |
| | 4:7-5:4 | | ἐάν τις εἴπη ὅτι 4:20 | | 4:9, 10, 13, 17 | |
| | 5:5-12 | | | ② 5:1[x2], 4 | 5:2 | 5:3, 4 5:9, 11, 14 |
| エピローグ (5:13-21) | | | | | | |

※ Iヨハネ書の三区分については、注(18)を参照のこと。

3. 定型句表現

3-1. 「もしわたしたちが～と言うならば」(ἐάν εἰπόμεν ὅτι)、「もし誰かが～と言うならば」(ἐάν τις εἴπη ὅτι)、「～と言う者は」(ὁ λέγων ὅτι)

古くから研究者たちが気づいてきた I ヨハ 1:6-2:11 における「対句的並行法」(antithetical parallelism)、もしくは対句表現 (antithesis) は、典型的な「格言的表現」を駆使した「定型句表現」のひとつでもある⁽¹⁹⁾。假定法を用いるところに特徴があるが、この表現は知恵文学などや新約文書でも見られる(シラ 27:3、マコ 8:34、ルカ 17:6、ヤコ 1:5, 26; 3:2 他)。假定法の条件節(ἐάν + アオリスト接続法[もしくは接続法])で始まる 1:6, 8, 10 と、現在分詞(ὁ λέγων ὅτι...)を用いる 2:4, 6, 9 は、基本的には同じ意味内容を示す別の表現方法である(ヤコ 4:11; 5:20)⁽²⁰⁾。I ヨハ 4:20 は、そのヴァリエーション(変奏形)であると言える。これに類する用例は他にも、「誰でも～する者は」(ὅστις, ヤコ 2:10)、「～する者は」(ὅς ἄν..., マコ 8:35、ヤコ 4:4) などがあり、I ヨハネ書でも用例がある(ὅς ἄν..., 2:5; 3:17; 3:22; 4:15)。

このような「定型句表現」は、ヘブライ語聖書の法規的な(jurisdictive)表現を背景として、掟を遵守する者とそうでない者の対比を浮き彫りにする際の表現方法でもある(Cf. 出エ 21:12; 35:2、レビ 15:10, 19、民 31:19、箴言 9:4, 16; 12:1; 20:1、シラ 3:3, 4, 5, 6; 4:12, 13, 15 他)。I ヨハ 1:5 では、「神は光である」という I ヨハネ書前半の基盤となる主要テーマが提示されている。これに続く 1:6 以下の定型句表現は、「闇の中を歩む」(1:6)・「光の中を歩む」(1:7)、「罪がないという」(1:8)・「自分の罪を告白する」(1:9) …と、光である神との「交わり」を持つ者と持たない者を二分する議論となっている。I ヨハネ書の場合も、神の言葉や真理がその人の内にあるか否か、すなわち、神に属する者であるか否かが示されている。この意味では、ヘブライ語聖書の用例と並行する用法となっている。そして、これらの定型句を使用する文は(1:6, 8, 19; 2:4, 9, 11)、いずれも神に属さない者たちの行為、共同体のメンバーとしてはあるまじき倫理的行為を提示す

るために用いられている。

これらの定型句表現が、Iヨハネ書特有のレトリック手法であることは、古くから研究者の間で指摘されてきた。いずれも、古典的な対句表現法であり、ひとつの言明が肯定文と否定文の対比で語られ、二元論的なイメージを活用するヨハネ文書の傾向に即したレトリック用法となっている。Iヨハ1:5-2:11は、テキストの中でも際立っており、このようなスタイルが偶然であるとは想定し難い。Brownも、「これらのパターンについては何らかの説明が必要になる」と述べている⁽²¹⁾。

過去においては、こうした特徴的な文体の変化が見られるテキスト箇所は、背後にあると想定される「資料」との関係で説明されてきた（「資料説」解釈）。他方、SchnackenburgやHaenchenは当初から、こうした表現方法はIヨハネ書特有のレトリック用法であると主張していた⁽²²⁾。編集史批評は資料説を支持せず、別の解釈として「論敵のスローガン」説を提示したが、確かに、この定型句表現は動詞「言う」（λέγω）を共通に使い、誰かの発言を引用するスタイルなので、「論敵」との論争を前提とする場合、この解釈は一定の説得力を持つ。しかし、近年のレトリック批評では、いずれの解釈も後退しつつある。この箇所を含めて、以下で取り挙げるような各種の定型句表現がIヨハネ書に浸透している場合、このような資料説や論敵のスローガン引用で説明する必要はない⁽²³⁾。Iヨハネ書でのレトリック批評が登場して以来、これらの表現への解釈は変化している。

3-2. πᾶς formula

「～という者は皆」（πᾶς ὁ + 現在分詞）も対句法な格言的表現の一種であり、「～という者（皆）」と「言わない者」の対比を際立たせる。上述の「～と言う者は」（ὁ λέγων ὅτι）に「皆」（πᾶς）が付記されている形である⁽²⁴⁾。従って、この定型句表現もIヨハネ書の二元論的なメンタリティをよく表現している。この定型句表現は、主に2:18-3:24と5:1-4に集中しており、二つの群を形成している（①2:23-3:15、②5:1-4）。4:7の例はやや独立した例と言える（表2参照）。

まず、①群について。Iヨハ 2:18-3:24 (三分割の第二のセクション)⁽²⁵⁾ は、論争テキスト箇所を含み (2:18-19)、「神の子たち」と「悪魔の子たち」の対比を明らかにしていくテキスト箇所である。Iヨハネ書は、「終わりの時」(Iヨハ 2:18, ἐσχάτη ὥρα のしるしとして「反キリスト」の出現を述べ、この「元仲間」の「離反」(「彼らはわたしたちから出て行った」2:19)を「終わりの時」のしるしと解釈している⁽²⁶⁾。2:22 (「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくて、誰のことでしょうか」)は、この対立と離反が、キリスト論的な理解の違いに基づくことを示唆しているが、テキスト箇所からは具体的にどのようなキリスト論での対立であったのかを正確かつ詳細に推測することは困難である⁽²⁷⁾。

Lieu は、この論争箇所 (2:18-19)、「わたしたち」対「彼ら」(=「反キリスト」)という主語の使い分けが行われており、聴衆(読者)である「あなたがた」が、「わたしたち」に帰属するということを説得していると解釈した⁽²⁸⁾。確かに、「あなたがた」と呼ばれている人々は (18, 20, 21, 24, 25 節)、最終的に「わたしたち」に組込まれていく (3:1 以降)。ここでは、「わたしたち」対「彼ら」の対比が提示されているが、「彼ら」が引き立て役 (好対照, foil) となり、「わたしたち」の倫理的規範に基づいた正しい在りようを際立たせるレトリック装置として機能している。

こうした論争テキスト箇所が続いて、2:23 を皮切りに、πᾶς 定型句表現が登場し、ここから何度もこの定型句表現が繰り返されている。同時に 23 節は、そこまでの議論を総括する内容となっている (「御子を否定する者は皆、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持つ」πᾶς ὁ ἀρνούμενος τὸν υἱὸν οὐδὲ τὸν πατέρα ἔχει, ὁ ὁμολογῶν τὸν υἱὸν καὶ τὸν πατέρα ἔχει)。つまり、キリスト論的告白が、「神の子たち」と「悪魔の子たち」の分水嶺となっているのである。ここでの対比は、語彙的にも極めてシンプルであり、さらに、「わたしたちから〔出て行った〕」(ἐξ ἡμῶν, v.19 [x4]) や、「わたしたちと共に (わたしたちに属する)」(μεθ' ἡμῶν, v.19) という表現が、この二つの陣営をさらに効果的に対極化していく。この二つの陣営の倫理的行為の違いを二極分化するために、Iヨハネ

書は $\pi\acute{\alpha}\varsigma$ 定型句表現を活用していると思われる。

以下の表3は、この対比をまとめている。必ずしも、対がきちんと成立していない部分もあるが（例えば、3:3）、ほぼこの対比のうちに二つの陣営の特徴を述べていることがわかる。対比が微妙にずれる・欠けるという点も、Iヨハネ書的であると言えよう。前述の定型句表現が、メンバーとして相応しくない倫理的行為について使用されていたのに対して、この $\pi\acute{\alpha}\varsigma$ 定型句表現は、相応しい行為と相応しくない行為両方に用いられ、これによって二つの陣営の対立・対比を鮮明にしている。おびただしい数の $\pi\acute{\alpha}\varsigma$ 定型句表現は（2:29; 3:3, 4, 6 [x2], 7, 8, 9, 10 [x2], 15）、否応なしに、「神の子たち」と「悪魔の子たち」とを明示して対比させ、その違いを強調する。Iヨハ3:1-10のテキスト箇所は、ほとんど $\pi\acute{\alpha}\varsigma$ 定型句表現で構成されていると言っても過言ではない。

表3

| 神の子たち | | 悪魔の子たち | |
|-------|---|--------|---|
| 2:23b | ὁ ὁμολογῶν τὸν υἱὸν καὶ τὸν πατέρα ἔχει | 2:23a | πᾶς ὁ ἀρνούμενος τὸν υἱὸν οὐδὲ τὸν πατέρα ἔχει |
| 2:29 | πᾶς ὁ ποιῶν τὴν δικαιοσύνην ἐξ αὐτοῦ γεγέννηται | 3:10a | πᾶς ὁ μὴ ποιῶν δικαιοσύνην οὐκ ἔστιν ἐκ τοῦ θεοῦ, |
| 3:3 | καὶ πᾶς ὁ ἔχων τὴν ἐλπίδα ταύτην ἐπ' αὐτῷ ἀγνίζει ἑαυτὸν, καθὼς ἐκεῖνος ἀγνός ἐστιν. | | |
| 3:7 | ὁ ποιῶν τὴν δικαιοσύνην δίκαιός ἐστιν, καθὼς ἐκεῖνος δίκαιός ἐστιν. | 3:4 | Πᾶς ὁ ποιῶν τὴν ἁμαρτίαν καὶ τὴν ἀνομίαν ποιεῖ, καὶ ἡ ἁμαρτία ἐστὶν ἡ ἀνομία |
| 3:6 | πᾶς ὁ ἐν αὐτῷ μένων οὐχ ἁμαρτάνει. | 3:6 | πᾶς ὁ ἁμαρτάνων οὐχ ἐώρακεν αὐτὸν οὐδὲ ἔγνωκεν αὐτόν. |
| 3:9 | Πᾶς ὁ γεγεννημένος ἐκ τοῦ θεοῦ ἁμαρτίαν οὐ ποιεῖ, ὅτι σπέρμα αὐτοῦ ἐν αὐτῷ μένει, καὶ οὐ δύναται ἁμαρτάνειν, ὅτι ἐκ τοῦ θεοῦ γεγέννηται | 3:8 | ὁ ποιῶν τὴν ἁμαρτίαν ἐκ τοῦ διαβόλου ἐστίν |
| 4:7 | πᾶς ὁ ἀγαπῶν ἐκ τοῦ θεοῦ γεγέννηται καὶ γινώσκει τὸν θεόν. | 3:10b | καὶ ὁ μὴ ἀγαπῶν τὸν ἀδελφὸν αὐτοῦ. |
| | | 3:15 | πᾶς ὁ μισῶν τὸν ἀδελφὸν αὐτοῦ ἀνθρωποκτόνος ἐστίν, καὶ οἴδατε ὅτι πᾶς ἀνθρωποκτόνος οὐκ ἔχει ζωὴν αἰώνιον ἐν αὐτῷ μένουσαν. |

最終的に、3:10 および 3:15 では、「兄弟を愛する」・「兄弟を憎む」という対比表現が登場する。3:11-16 において、自分の兄弟を殺したカイン（死に留まる者）と、兄弟のために自分の生命を捨てたイエスとの対比を浮き彫りにする表現でもある⁽²⁹⁾。3:15 で、「悪魔の子たち」（＝「彼ら」）は「人殺し」（ἀνθρωποκτόνος, 3:15）とまで呼ばれている。それに対し、「わたしたち」＝「神の子たち」は、イエスに属し、「死から生命に移っている」（14 節）。「神の子たち」と「悪魔の子たち」は、「愛する」・「憎む」という倫理的行為の違いのみでなく、「（永遠の）生命」・「死」という救済論的現実でも二分されている。

また、「兄弟を愛する」（3:10）・「兄弟を憎む」（3:15）の対比は、続く 4 章の「相互愛」のセクション（4:7-21）への「前触れ」となる節でもある。実際、4:7 での πᾶς 定型句表現は、その「前触れ」として機能しており、また、4:10 の単独例は、3:1-10 のセクションの「エコー（響き）」として機能していると思われる。（エピローグでの繰り返し〔②群〕については、後述する。）

3-3. ἐν τούτῳ formula

この ἐν τούτῳ (γινώσκομεν ὅτι ...) 「これによって、（わたしたちは～ということがわかる）」も、明らかに I ヨハネ書の定型句表現となっている。I ヨハネ書でのこの定型句表現の頻度は顕著である。新約文書では 27 回の用例があるが、そのうち 12 例は I ヨハネ書にある。他の定型句表現と同様に、要点をハイライトし、テキストの中で「神学的焦点」を明確にする役割を果たしている。

ἐν τούτῳ 定型句（I ヨハ 2:3, 5c; 3:10, 16, 19, 24; 4:2, 6, 9, 10, 13, 17; 5:2）のうち、3:10（「明らかである」 ἐν τούτῳ φανερά ἐστίν）・4:9（「明らかにされた」 ἐν τούτῳ ἐφανερώθη）・4:10（「である」 ἐστίν）・4:17（「神の愛が全うされている」 ἐν τούτῳ τετελείωται ἡ ἀγάπη）⁽³⁰⁾ を除くと、他はすべて動詞「知る・分かる」（γινώσκω, γινώσκομεν）と共に用いられている。しかし、動詞は同じでも人称や時制でバリエーションがあり⁽³¹⁾、ἐν τούτῳ の前置詞が異なるものもある（3:19, ἐν τούτῳ γνωσόμεθα ὅτι/ 4:6, ἐκ τούτου γινώσκομεν。「わかる（知る）」と言われているだけに、強調されている内容による「真偽の判別」が可能になる事柄に

ついて指示されているが、直接名詞が続く場合を除けば（「愛」3:16、「神の霊」4:2）、大半は $\delta\pi$ 以下（もしくは、 $\acute{\epsilon}\acute{\alpha}\nu$ [2:3]、 $\acute{\iota}\nu\alpha$ [4:17]、 $\acute{\omicron}\tau\alpha\nu$ [5:2]、 $\acute{\epsilon}\kappa$ [3:24]）がその内容を示す⁽³²⁾。Iヨハネ書での「知る、わかる」（ $\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$ ）の背景に、ヘブライ語の יָדָע があると思われるが、この動詞が単に認識レベルの事柄を意味するのではなく、具体的（具象的）な事実や事象を指示するように、Iヨハネ書においても、「知る」ことは「実践する」ことに深く関連しており、殊に、「神を知ること」と「神の掟を守ること」が分かち難く結びつけられている⁽³³⁾。

「これによって（わたしたちに）わかる」（ $\acute{\epsilon}\nu\ \tau\acute{o}\upsilon\tau\omega\ \gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omicron\mu\epsilon\nu\ \delta\pi\iota$ ）の形式に、最初に注目したのは Law である⁽³⁴⁾。Law は、グノーシス主義者（「分離派」・「論敵」）に対する論争がテキスト全体に浸透していると解釈し、このパターンが「偽り」と「真理」の「判別基準のテスト」（ $\delta\omicron\kappa\iota\mu\acute{\alpha}\zeta\omega/\delta\omicron\kappa\iota\mu\alpha\sigma\acute{\iota}\alpha$ ）として機能していると唱えた⁽³⁵⁾。後の編集史批評による研究においても——特に、反グノーシス、もしくは論争的解釈が前提とされていた時代には、同じ様な解釈がなされてきた。しかし、Iヨハネ書を殊更に論争文書として解釈しなくてもよい場合、この同じパターンはひとつのレトリック手法として、他の定型句表現と共に機能しており、Law が言うように、確かに「判別基準のテスト」であるが、共同体外部の論敵を意識するというよりは、内部メンバーが自らの倫理的規範に関する自己評価を行う意味での「テスト」であると解釈することもできる⁽³⁶⁾。つまり、内部メンバーの「完全主義」（perfectionism）を奨励する独自のレトリック用法である。事実、Iヨハネ書では、「わたしたちは知っている（わかる）」、あるいは「わたしたちが聞いている」（ $\acute{\alpha}\kappa\eta\kappa\acute{o}\alpha\mu\epsilon\nu$ ）・「あなたがたが聞いた」（ $\eta\kappa\acute{o}\upsilon\sigma\alpha\tau\epsilon$ ）という表現は、ほぼ例外なく、共同体メンバーで「共有している事柄」について言及する際に用いられている⁽³⁷⁾。Malherbe は「書簡的パレネーシス」（epistolary paraenesis）の特徴として、共通理解した「教訓」（precept）を提示すると述べている⁽³⁸⁾。つまり、新しい事柄を示すのではなく、既によく知られた、誰もがわかっている事柄を教訓的に確認するのであり、繰り返して説くことで、それを想起させるのである。この意味では、Iヨハネ書の「わたしたちは

知っている」・「あなたがたは（あなたは）知っている／わかっている」という表現の繰り返しは、パレネーシス的な特徴を示していると言える。それは、序文の語りから始まり、手紙の各処で繰り返される「知っている」・「わかる」という動詞の使用からも明らかである（Cf. 5:18, 19, 20 での「わたしたちは知っている」〔οἶδαμεν ὅτι〕の繰り返し）。

さて、この定型句表現は、次の3つのグループに分けられ、それぞれが特定のセクションに集中している（表2参照）。

①群での ἐν τούτῳ 定型句は、2:3 および 2:5 に認められる。I ヨハ 1:5-2:17（三分割の最初のセクション）での主要なテーマは「掟（ἡ ἐντολή）を守る」ことである。ヨハネ文書の「掟」とは、「互いに愛し合う」（ἀγαπῶμεν ἀλλήλους, 2:7-8, 10; 3:11, 23; 4:7, 11, 12// cf. ヨハ 13:34; 15:1-17）ことである。このテーマは、I ヨハ 3:11-18 および 4:7-21 でさらに展開し、深められていくのであるが、この文脈では、「掟を守るか否か」という倫理的行為が、共同体メンバーの真偽の試金石となっているところに焦点がある。共同体の「真のメンバー」は、「神の愛がその人のうちに全うされて」（2:5）おり、他方、「偽のメンバー」は「その人のうちに真理がない」（2:4）＝「偽り者」（ψεύστης 2:4）とされている。この判別基準を示す 2:3, 5 での ἐν τούτῳ 定型句は、この箇所の要点を強調し、2:1-6 で緊密なクラスターを形成している⁽³⁹⁾。

下図が示す通り、2:3 と 2:5 は、この定型句で相互並行しており、また、2:4 と 2:6 も、ὁ λέγων ὅτι で並行している。しかも、意味は異なるが同じギリシア語句を用いる 2:4 および 2:6 の ἐν τούτῳ（「その人のうちに」）は、さらにこのクラスターを補強していると言える。実に、2:3-6 は、「掟を守ること」（ἐὰν τὰς ἐντολάς αὐτοῦ τηρῶμεν）＝「神を知ること」（ἐγνώκαμεν αὐτόν）＝「神の愛がその人のうちに全うしている」（ἐν τούτῳ ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ τετελείωται）＝「これによって、わたしたちは彼（神）のうちにいるがわかる」（ἐν τούτῳ γινώσκομεν ὅτι ἐν αὐτῷ ἔσμεν）という流れで、このセクションの神学的要点を凝縮している。また、「彼のうちにいる」（2:5）という表現は、2:6 で動詞「留まる」（μένω）とし

て敷衍されており、意味的にはいずれもヨハネの特徴的な「相互内在」を示す。「彼のうちに留まる」⁽⁴⁰⁾ という表現は、2:10, 14, 17、また逆に「彼がわたしたちのうちにいる」(3:24; 4:13) でも繰り返されている。後述するように、動詞「留まる」は、I ヨハネ書では、これらの三つの群を繋ぎ合わせる神学的キーワードとして機能している。

- 2:3 Καὶ ἐν τούτῳ γινώσκομεν
ὅτι ἐγνώκαμεν αὐτόν, ἐὰν τὰς ἐντολάς αὐτοῦ τηρῶμεν.
- 2:4 ὁ λέγων ὅτι Ἔγνοκα αὐτόν καὶ τὰς ἐντολάς αὐτοῦ μὴ τηρῶν,
ψεύστης ἐστὶν καὶ ἐν τούτῳ ἡ ἀλήθεια οὐκ ἔστιν
- 2:5 ὃς δ' ἂν τηρῇ αὐτοῦ τὸν λόγον,
ἀληθῶς ἐν τούτῳ ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ τετελειώται,
ἐν τούτῳ γινώσκομεν ὅτι ἐν αὐτῷ ἐσμεν.
- 2:6 ὁ λέγων ἐν αὐτῷ μένειν ὀφείλει
καθὼς ἐκεῖνος περιπάτησεν καὶ αὐτὸς [οὕτως] περιπατεῖν.

ἐν τούτῳ 定型句の②群は、3:10, 16, 19, および 24 である。このセクションの直前には、既に触れた πᾶς 定型句の一群があり (2:23-3:15)、ここでの定型句表現は、πᾶς 定型句表現と相乗効果をもたらしている。2:28-3:18 は、二種類の定型句表現を組み合わせるに密に構成されていると言えるが、ἐν τούτῳ 定型句は、πᾶς 定型句の議論を強調する機能を果たしている。特に、3:10a は、一連の πᾶς 定型句が強調してきた「神の子たち」と「悪魔の子たち」の対比を一文で要約している。——「これによって、神の子たちと悪魔の子たちは明らかである」(ἐν τούτῳ φανερά ἐστιν τὰ τέκνα τοῦ θεοῦ καὶ τὰ τέκνα τοῦ διαβόλου)。次に、3:16 (「これによって、わたしたちは愛を知った。〔すなわち〕 あの方 [=キ

リスト]⁽⁴¹⁾ がわたしたちのために命を捨ててくれた」 ἐν τούτῳ ἐγνώκαμεν τὴν ἀγάπην, ὅτι ἐκεῖνος ὑπὲρ ἡμῶν τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἔθηκεν.」3:16 に含まれる「愛」は、次のセクション (4:1 以降) への「つなぎ」として機能しているのであるが、I ヨハネ神学においては、「相互愛」(=「彼」の掟) を可能にする基礎はキリストの贖罪死であり、彼の贖罪死は父である神の愛(わたしたち、神の子たちへの愛) そのものを具体化している (Cf. ヨハ 3:16-17)。事実、相互愛の基礎となるキリストの贖罪死については、I ヨハ 4:9-10 で同じ内容が繰り返されている。従って、I ヨハ 3:16 は、I ヨハネ書の救済論を端的に表明する一節となっている。こうして、3:16 は I ヨハネ書の神学的核心 (神の愛とその掟 [=兄弟同士の相互愛] の関係) を明瞭にしつつ、続く4章で展開される「愛の賛歌」への「つなぎ」となるポイントも抑えている。つまり、この定型句表現は、I ヨハネ書の神学的核心を強調しながら、手紙の中で神学的なネットワークを形成している。

最後に、ἐν τούτῳ 定型句の③群は、4:2a, 6, 9, 10, 13, 17, そして5:2である。この箇所では、「偽りの霊」と「真理の霊」の識別から始まり (4:2, 6)、「愛の賛歌」(4:7-21) へとテーマ移行していく。ἐν τούτῳ 定型句はこれらを囲い込み、その中で「神の愛」(神が人間に示した愛、4:9, 10) と、その愛のうちに留まる「わたしたち=神の子たち」(4:13, 17) の在りようを際立たせている。

繰り返される ἐν τούτῳ 定型句表現は、まず、4:1-17 のセクション全体を相互に結びつける効果をもたらしている。いずれも神学的要点を端的にまとめる機能を果たしている。まず、最初の4:2a (「これによって、あなたがたは神の霊がわかる」) は、続く4:2b が「イエス・キリストが肉のうちに来られた」というキリスト論的告白の中核を示す。これは、暗にキリストの贖罪死を示唆しているが⁽⁴²⁾、4:9-10 がこれをさらに明確に述べている。しかも、この贖罪死が兄弟愛の基盤となっていることは、前述の通りであるが、ここでもそれが繰り返されている。

4:2 は、このセクション全体を総括する一文でもある。4:2 の「神の霊」(τὸ πνεῦμα τοῦ θεοῦ) は、4:1-6 を要約する語句でもある。続く4:2b-3 以降が、このテーマを展開し、「神の霊」と「惑わしの霊 (=反キリストの霊)」を二分し

ていく (πάν πνεῦμα ὁ ὁμολογεῖ Ἰησοῦν Χριστὸν ἐν σαρκὶ ἐληλυθότα ἐκ τοῦ θεοῦ ἐστὶν [v.2b], καὶ πάν πνεῦμα ὁ μὴ ὁμολογεῖ τὸν Ἰησοῦν ἐκ τοῦ θεοῦ οὐκ ἐστὶν [v.3a])。4:6 もまた、ここでの議論を端的にまとめている——「これによって、わたしたちは、真理の霊と惑わしの霊がわかる」(ἐκ τούτου γινώσκωμεν τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας καὶ τὸ πνεῦμα τῆς πλάνης)。

続くセクション (4:7-12) では、「相互愛」奨励のテーマに移行する(「愛する者たちよ、互いに愛し合おう」4:7)。4:9; 4:10; 4:13; 4:17 は、それぞれ同じ定型句表現で、Iヨハネ書の神学的核心を見事に抑えている。「互いに愛し合おう」という一連の奨励文の中で、定型句表現の文章が、「神の愛」の基盤となるキリストの派遣と贖罪死 (4:9, 10)、「神の愛がわたしたちのうちにあり、全うされている」現実の根拠となる「神の霊」の贈与 (4:13, 17) についてまとめあげている。

最後の4:13は、ここまでの議論 (4:1-12) を総括する。同時に4:13は、同じ定型句を用いた2:5 (①群) および3:24 (②群) と、内容的に共鳴していることに注目したい。

2:5 ἐν τούτῳ γινώσκωμεν ὅτι ἐν αὐτῷ ἐσμεν

3:24 καὶ ἐν τούτῳ γινώσκωμεν ὅτι μένει ἐν ἡμῖν, ἐκ τοῦ πνεύματος οὗ ἡμῖν ἔδωκεν

4:13 ἐν τούτῳ γινώσκωμεν ὅτι ἐν αὐτῷ μένομεν καὶ αὐτὸς ἐν ἡμῖν, ὅτι ἐκ τοῦ πνεύματος αὐτοῦ δέδωκεν ἡμῖν

これら3つのἐν τούτῳ定型句表現は、「留まる」(ある)に焦点があり、その根拠を「わたしたちに与えられている神の霊」としている。つまり、2:5, 3:24, 4:13は、同じ神学的ポイント——「相互内在」——を強化し⁽⁴³⁾、それが神の霊によって可能にされていることを主張している(内容的には、2:5 + 3:24 = 4:13)。こうして、同じ定型句表現で、すべてのἐν τούτῳ定型句表現のクラスター (①・②・③) を相互に結びつけているのである。

5:2は、手紙の終わりに向けて、「神の子たち」の「相互愛」=「神の掟」につ

いてまとめていく一文として機能している。(これも最後にまとめて述べる。)

3-4. οὗτος ἐστίν ([καὶ] αὕτη ἐστίν) formula

これもまた、定型句表現のひとつである。Οὗτος ἐστίν (女性名詞形、αὕτη ἐστίν、「これこそ～です」) は、レトリック手法として、「これこそ」に続く名詞を殊更に強調する機能を果たしている。ここでは、女性名詞形の定型句表現のみを取り上げるが、その多くが καὶ を伴っており、Καὶ αὕτη ἐστίνとして定型句表現になっていると考えることもできる。いずれも強調されている名詞は ὅτι、ἵνα 以下、もしくは同格の名詞句が説明している。I ヨハネ書では、女性名詞形が肯定的な内容を強調しているのに対して、男性名詞形の場合は肯定的・否定的の両方が含まれる (2:22; 5:6, 20, また II ヨハ 7, 9。ただし、I ヨハ 5:6 「この方こそ、…イエス・キリストです」、5:20 「この方こそ、真の神であり、永遠の生命です」 以外は、敵対者に関する否定的な言明)。

| | Copula + Pronoun + noun | Referent |
|------|---------------------------------|---|
| 1:5 | Καὶ ἐστίν αὕτη ἡ ἀγγελία | ὅτι ὁ θεὸς φῶς ἐστίν |
| 2:25 | καὶ αὕτη ἐστίν ἡ ἐπαγγελία | τὴν ζωὴν τὴν αἰώνιον |
| 3:11 | αὕτη ἐστίν ἡ ἀγγελία | ἵνα ἀγαπῶμεν ἀλλήλους |
| 3:23 | καὶ αὕτη ἐστίν ἡ ἐντολή | ἵνα πιστεύσωμεν τῷ ὀνόματι τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ ἀγαπῶμεν ἀλλήλους |
| 5:3 | αὕτη ... ἐστίν ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ | ἵνα τὰς ἐντολὰς αὐτοῦ τηρῶμεν |
| 5:4 | καὶ αὕτη ἐστίν ἡ νίκη | ἡ πίστις ἡμῶν |
| 5:9 | αὕτη ἐστίν ἡ μαρτυρία τοῦ θεοῦ | ὅτι μεμαρτύρηκεν περὶ τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ |
| 5:11 | καὶ αὕτη ἐστίν ἡ μαρτυρία | ὅτι ζωὴν αἰώνιον ἔδωκεν ἡμῖν ὁ θεός |

5:14 καὶ αὕτη ἐστὶν ἡ παρρησία ὅτι ἐάν τι αἰτώμεθα κατὰ
τὸ θέλημα αὐτοῦ ἀκούει ἡμῶν

- ※ 5:6 Οὗτός ἐστιν ὁ ἐλθὼν δι' ὕδατος καὶ αἵματος, Ἰησοῦς Χριστός
5:20 οὗτός ἐστιν ὁ ἀληθινὸς θεὸς καὶ ζωὴ αἰώνιος

使用されている女性名詞は、「知らせ」ή ἀγγελία (1:5 および 3:11)、「約束」ή ἐπαγγελία (2:25)、「掟」ή ἐντολή (3:23)、「神への愛」ή ἀγάπη τοῦ θεοῦ (5:3)、「(世に打ち勝つ) 勝利」ή νίκη (5:4)、「神の証し」ή μαρτυρία τοῦ θεοῦ (5:9)、「証し」ή μαρτυρία (5:11)、「確信」ή παρρησία (5:14) と、Iヨハネ書で重要な神学的キーワードが網羅されている。男性名詞形の 5:6 および 5:20 を含めると、この定型句で、「イエス・キリスト」(5:6)・「真の神、永遠の生命」(5:20) という信仰の中核を示す語句にも言及されることになる。

最初の 4 例 (1:5; 2:25; 3:11, 23) が比較的散発的に登場するのであるが、それでも、明らかに要所をおさえるような部分に配置されている。Iヨハネ書の中では、要点に楔を打つように、この定型句表現が主要な神学的キーワードをおさえている。

さて、最後の群 (5:3,4, 9, 11 および 14) は、エピローグに向かう前段階の部分 (5:5-12) に集中し、明らかにクラスターを形成している。さらに、注目すべきことは、この箇所では、前述の定型句表現が総動員されていることである。5:1-5 (もしくは 5:1-6) は、πᾶς 定型句 (5:1[x2], 4)、ἐν τούτῳ 定型句 (5:2)、そして、この αὕτη ἐστὶν 定型句 (5:3, 4) のみで構成されている。ここまで説明してきた定型句表現を組み合わせ、織り重ねることで、強調作用は相乗効果を生み出し、大きなインパクトを与えている。聴衆 (読者) に対して、パフォーマンスな効果が最大限になるように計算されている。手紙の最終部分に向かうところで、定型句表現のコンビネーションが畳みかけるように繰り返され、Iヨハネ書の神学的要点を再確認しながら、盛り上げている。これらのレトリック用法は、いわば「クレッシェンド効果」をもたらしていると言える。「これこそが神の愛 (αὕτη

... ἐστὶν ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ)、〔すなわち〕わたしたちが神の掟を守ること (ἵνα τὰς ἐντολάς αὐτοῦ τηρῶμεν, 5:3)。これこそが勝利 (αὕτη ἐστὶν ἡ νίκη ..., わたしたちの信仰 (ἡ πίστις ἡμῶν, 5:4))。

また、5:9, 11 および 14 は、Iヨハネ書の神学的キーワードで楔を打ち、議論全体を締めている。5:6-12 は、テキストとして異読の数が非常に多くなっている箇所であり⁽⁴⁴⁾、テーマ的にも思わぬ方向に転じているが、この定型句表現が、5:1-5 の非常に緻密に形成されたテキスト部分とこの箇所をつなぎ合わせている。ここでの神学的核心のキーワードは、「証し」(ἡ μαρτυρία)、および「(永遠の) 生命」(ἡ ζωὴ) である。5:9a の「神の証し」(ἡ μαρτυρία τοῦ θεοῦ) は、「人間たちの証し」(τὴν μαρτυρίαν τῶν ἀνθρώπων) と対比されているのだが、「これこそ神の証しである。〔すなわち〕彼(神)が御子について証しをしたこと」(5:9)、さらに「これこそ証しである。〔すなわち〕神が永遠の生命をわたしたちに与えたこと (ὅτι ζωὴν αἰώνιον ἔδωκεν ἡμῖν ὁ θεός)」(5:11) は、明らかに対応しており、二つの αὕτη ἐστὶν 定型句で「神の証し」をハイライトする。

同時に、この最終部での神学的核心は、序文 (1:1-4) と対応している。序文では、「人間の証し」で始まっていたが——すなわち、「わたしたちが聞いたもの、わたしたちの眼で見たもの、わたしたちの手で触れたもの——生命の言について」という「わたしたち証言」は、手紙の最後に来て、「神の証し」で裏打ちされる。さらに、5:13-21 のエピローグにおいては、神の名を信じる者たちは「永遠の生命を持っていること」(5:13) が強調されており、最後の αὕτη ἐστὶν 定型句である 5:14 は、「これこそが、(わたしたちが) 神に対して持っている確信である」とまとめている。こうして、序文とエピローグは、Iヨハネ書の手紙で神学的な「囲い込み」を形成し、「わたしたち」の確信の真实性を再確認する構成となっているのである。

IV. 結論

Iヨハネ書は、定型句表現の繰り返しを、奨励・勧告を促すための独自のレト

リック装置として駆使している。いずれの定型句も、神学的に重要なポイントを要約し、強調している。「強調文」を構成する定型句表現の繰り返しにより、パフォーマンスな効果が演出されている。また、このように手紙全体の中で、各種の定型句表現の配置を見てみると、最初の用法（「～と言うならば」・「～と言う者は」）も、資料説に帰すよりは、ヨハネ独自のレトリック用法として解釈した方が自然であると思われる。

ひとつ（または複数）の定型句表現が集中するクラスター（群）においては、そこでの中核的な議論がハイライトされ、テーマ的な統一性や焦点を明確にしている。同じ定型句の一文には、次のセクションのキーワードが含まれ、次のセクションへの「つなぎ」として機能することが多い。この意味で、定型句表現のクラスターは、相互に関連づけられ、手紙の中でネットワークを構成しているとも言える。

I ヨハネ書の定型句表現は、共同体メンバーの奨励・勧告を促すためのレトリックである。I ヨハネ書は、論理的な構成・構造の分析が困難であることが知られているが、様々な定型句表現が、どこか掴みどころのない螺旋的構成に楔を打ち、インパクトをもたらし、論理的展開とは別の形で手紙の中での議論の発展・展開に寄与している。I ヨハネ書の文章は、限られた語彙と極めて素朴なギリシア語を用いているが、これらの定型句表現が持つ「単純で記憶に残りやすい」⁽⁴⁵⁾ 格言的表現により、聴衆に対して強大なインパクトをもたらすテキストになっている。そうでなければ、この文章は単調な印象を免れない。それは、ヨハネ独自の「パレネーゼの手紙」を形成している。

今後の課題としては、I ヨハネ書の奨励・勧告に焦点を充て、これを「パレネーゼの手紙」として分類する場合、他の公同書簡（ヤコブ書、ペトロ書、〔ヘブライ書〕）との比較研究も可能になる。ヨハネ書簡は、ヨハネ文書の中で「追加文書」のように扱われがちであるが、二世紀の諸文書との比較を通して、これまで光が当てられてこなかったI ヨハネ書の一面を浮き彫りにすることが可能になるのではないか。

注

- (1) 執筆目的に関しては、以下を参照のこと。拙論「Iヨハネ書の執筆意図について——近年の研究動向における「非論争的」解釈——」、『新約学研究』第44号(2016年): 43-64頁。
- (2) Judith M. Lieu, "Authority to Become Children of God: A Study of 1 John," *NovT* 23 (1981): 210-228; eadem, "Us or You? Persuasion and Identity in 1 John," *JBL* 127 (2008): 805-819. 他にも、Dietmar Neufeld, *Reconceiving Texts as Speech Acts. An Analysis of 1 John* (Biblical Interpretation Series 7; Leiden, 1994); Ruth B. Edwards, *The Johannine Epistles* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996); Terry Griffith, "A Non-polemical Reading of 1 John: Sin, Christology and the Limits of Johannine Christianity," *TynB* 49.2 (1998): 253-276; idem, *Keep Yourself from Idols: A New Look at 1 John* (JSNTSS 233; Sheffield, 2002); Wendy E. Sprouston North, *The Lazarus Story within the Johannine Tradition* (JSNTSS 212; Sheffield: Sheffield Academic Press, 2001); eadem, *A Journey Round John: Tradition, Interpretation and Context in the Forth Gospel* (London: Bloomsbury T&T Clark, 2015); Hansjörg Schmid, *Gegner im 1. Johannesbrief? Zu Konstruktion und Selbstreferenz im johanneischen Sinnsystem* (BWANT 8/19; Stuttgart: Kohlhammer, 2002); idem, "How to Read the First Epistle of John Non-Polemically," *Bib* 85 (2004): 24-41; Daniel R. Streett, *"They Went Out from Us": The Identity of the Opponents in First John* (Berlin: Walter de Gruyter, 2011).
- (3) 他にも、「偽り者(ψεῦδος)」(Iヨハ2:22)。同じ表現は、1:10; 2:4; 4:20; 5:10にもある。Iヨハ2:19「彼らはわたしたちから出て行った(ἐξ ἡμῶν ἐξῆλθον)」という記述から、共同体からのメンバー離反があったと思われ、ここでの論敵は「分離派」と呼ばれている。
- (4) ただし、厳密に言うくと、キリスト論についての言及は、Iヨハ4:2-3およびIIヨハ7のみ。
- (5) Hans-Josef Klauck, *Der erste Johannesbrief* (EKKNT 23/1; Zürich: Benziger Verlag; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991): 41-42; Rudolf Schnackenburg, *Die Johannesbriefe* (Freiburg: Verlag Herder, 1953): 14; Raymond E. Brown, *The Epistles of John*, AB 30 (New Haven: Yale University Press, 1982): 73-79 他。
- (6) 「パレネーシス」(Paraenesis)・「パレネーゼ」(Paränese) という概念は、多様な定義が可能であり、議論の対象でもある。Paul Wendland と Martin Debelius による古典的定義が有名であり、M. Dibelius はヤコブ書の文学ジャンルを「パレネーゼ」として分類した(1921)。それは、一貫したテーマがなく、倫理的奨励・勧告が緩やかに並べられ、徳目リストやハウスコードなどから構成されるという特徴を持つ。また、特定の社会的コンテクストに向けられているものではなく、一般的

な格言の集まりなどから構成されているとした。その後、Leo G. Perdue (1990)、Johannes Thomas (1992)、Wiard Popkes (1996) らにより、パレネーシスについてより幅広い定義が提示され、パレネーシスも特定の社会的背景や、特定の聴衆に向けたレトリカルな目的を持つことが示された。発表者がここで用いている「パレネーシス」は、Abraham Malherbe (1986, 1988) や Perdue に依拠し、これを紀元二世紀以降のキリスト教的「奨励・勧告」(書簡形式)として理解する。この意味で、初期キリスト教書簡はいずれもこの特徴を共有しており、キリスト教共同体への導入として、模範を示し、共同体で共通理解された教訓を繰り返し想起させ、奨励する機能をもつ。Cf. Manabu Tsuji, *Glaube zwischen Vollkommenheit und Weltlichkeit* (WUNT 2/93; Tübingen: Mohr Siebeck, 1997): 7-10. 脚注 16 も参照。

- (7) A. E. Brooke, *The Johannine Epistles* (New York: Charles Scribner's Sons, 1912): xxxiv-xxxviii; Theodor Häring, *Gedankengang und Grundgedanke des ersten Johannesbriefs* (1892) 他。
- (8) Georg Strecker, *Die Johannesbriefe* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989); [English translation] *The Johannine Letters: A Commentary on 1, 2, and 3 John* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress Press, 1996): xlv, 23.
- (9) Schnackenburg, *Die Johannesbriefe*, 2-3. さらに、Schnackenburg は、I ヨハネの執筆意図は、論争よりも奨励・勧告に焦点があると解釈している (1)。
- (10) Stanley K. Stowers, *Letter Writing in Greco-Roman Antiquity* (Philadelphia: The Westminster Press, 1986): 96.
- (11) ドイツ語圏では、Strecker に代表されるように、I ヨハネが論争箇所と非論争箇所から構成されることを前提とする研究者が多く、また非論争的箇所は基本的に「パレネーゼ」(奨励・勧告)であると見做している。Hans-Josef Klauck, *Der erste Johannesbrief*, 31-32; idem, *Die Johannesbriefe* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft [WBG], 1991): 68-77; David Rensberger, *1 John, 2 John, 3 John* (Nashville: Abington Press, 1997): 31; Ulrich Luz, "The Second Basic Conflict: Church Fellowship in the Controversy with Christian Gnosticism," in *Unity of the Church in the New Testament Today*, eds. by Ulrich Luz and Lukas Vischer, trans. by James E. Crouch (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2010): 149-151. PHEME PERKINS の場合、著作ではないが、本人の講義ノート (handout) による。
- (12) ヨハネ書簡のレトリック批評では、H.-J. Klauck, Duane F. Watson, F. Vouga などが先駆的な研究者である (H.-J. Klauck, "Zur rhetorischen Analyse der Johannesbriefe," *ZNW* 81 (1990): 205-225; Duane F. Watson, "1 John 2.12-14 as Distributio, Conduplicatio, and Expolitio: A Rhetorical Understanding," *JSNT* 35 (1989): 97-110; idem, "Amplification Techniques in 1 John: The Interpretation of Rhetorical Style and Invention," *JSNT* 51 (1993): 99-123. Cf. Duane F. Watson and Alan J.

Hauser, *Rhetorical Criticism of the Bible: A Comprehensive Bibliography with Notes on History and Method* (Leiden/New York: Brill, 1994); idem, *The Rhetoric of the New Testament: A Bibliographic Survey* (Blandford Forum, UK: Deo Publishing, 2006)。Watson は、西洋古典のレトリック修辭法 (rhetorical figures) を新約聖書に適用して分析し、Iヨハ2:12-14の独立した呼びかけ文の繰返し箇所を、*distributio* (異なるグループへの配分)、*conduplicatio* (繰返しによる増幅)、*expositio* (同じテーマの置換表現) として分析した。彼は、II・IIIヨハネについても、同様の分析を行っている (Watson, "A Rhetorical Analysis 3 John: A Study of Epistolary Rhetoric," *CBQ* 51 (1989): 479-501; idem, "A Rhetorical Analysis of 2 John According to Greco-Roman Convention," *NTS* 35 (1989): 104-130)。また、François Vouga もギリシア・ローマ時代の書簡を背景にヨハネ書簡を分析している (F. Vouga, *Die Johannesbriefe* [HNT; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1990]; idem, "La réception de la théologie johannique dans les épîtres," in *La communauté johannique et son histoire*, eds. by J.-D. Kaestli, P.-M. Poffet and J. Zumstein [Geneve: Labor et fides, 1990]: 283-302)。他にも、Neufeld がスピーチ・アクト理論を適用して、発話行為が聴衆 (読者) を変容するパフォーマンス力を持つテキストとしてIヨハネの解釈を行い (Dietmar Neufeld, *Reconceiving Texts as Speech Acts. An Analysis of 1 John* [Biblical Interpretation Series 7; Leiden: Brill, 1994])、また、Brickle は、「口承文化」(oral culture) における「口頭性 (orality)」・「聴覚性 (aurality)」に焦点を充て、Iヨハネ序文の「発声」(vocalization) とその効果に注目して、新たな方向でのレトリック解釈を試みている (Jeffrey E. Brickle, *Aural Design and Coherence in the Prologue of First John* [London/New York: Bloomsbury T&T Clark, 2012])。また、日本では唯一、山田がIヨハネの修辭学的分析を試みている (山田耕太「第一ヨハネ書の修辭学的分析」、『フィロンと新約聖書の修辭学』所収、新教出版社、2012年、295-319頁)。

- (13) Abraham Malherbe, "Hellenistic Moralists and the New Testament," in *Light From the Gentiles: Hellenistic Philosophy and Early Christianity, Collected Essays, 1959-2012, Vol. 2*, eds. by Carl R. Holladay, et al (Leiden/Boston: Brill, 2014): 675-749; *Paraenesis: Act and Form*, Semeia 50, Leo G. Perdue and John G. Gammie, eds. (Atlanta: Society of Biblical Literature, 1990); *Early Christian Paraenesis in Context*, eds. by James Starr and Troels Engberg-Pedersen (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004).
- (14) Iヨハネを「パレネーシスの手紙」とする研究者は、以下の通り。Stanley K. Sowers, *Letter Writing in Greco-Roman Antiquity* (Philadelphia: The Westminster Press, 1986): 94-96; Jonas Holmstedts, "Is there a paraenesis in 1 John?" in *Early Christian Paraenesis in Context*, eds. by James Starr and Troels Engberg-Pederson (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004): 405-430。また、Klauck も

- I ヨハネをバレネーゼの手紙として解釈する一人である (Klauck, *Der erste Johannesbrief*, 31)。
- (15) Wiard Popkes, "Paraenesis in the New Testament: An Exercise in Conceptuality," in *Early Christian Paraenesis in Context*, eds. by James Starr and Troels Engberg-Pedersen (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2004): 20.
- (16) Stephen S. Smalley, *1, 2, 3 John* (WBC 51 [revised edition] Nashville: Thomas Nelson, 2007): xxxvii; William Loader, *The Johannine Epistles* (London: Epworth, 1992): xxx; Brown, *The Epistles of John*, 109; Kenneth Grayston, *The Johannine Epistles* (Grand Rapids: Eerdmans, 1984)、他。
- (17) Klauck, *Der erste Johannesbrief*, 20, 24-25; Schnackenburg, *Die Johannesbriefe*, 7-8; Brown, *The Johannine Epistles*, 116-122; Gilbert Van Belle, "Repetitions and Variations in Johannine Research: A General Historical Survey," in *Repetitions and Variations in the Fourth Gospel: Style, Text, Interpretation* (BETL 223; Leuven: Université Catholique de Louvain, 2009): 30 "The Evangelist repeats himself but in the process he deepens his initial idea, gives it a different spin and adds to it related ideas."
- (18) I ヨハネ書の構成については、三分割説を採用する。手紙の構造・構成という点では、I ヨハネは非常に把握困難な様相を呈している。多くの研究者がその構造分析を試みながら、未だにその構造については研究者の間でも意見の一致が見られない。I ヨハネの構造・構成については、昔から構成の分析を基本的に諦める意見もあったが (Brooke [1912]: xxxii 他)、序文 (I ヨハ 1:1-4) およびエピローグ (5:13-21) を除いた部分を、二部、三部、四部、五部、六部に分割する立場がある。短い手紙でありながら、福音書との関係や手紙そのものの構造分析において、ここまで解釈がわかれている新約文書も珍しい。しかしながら、Schnackenburg に代表される「三分割説」(① I ヨハ 1:5-2:17、② 2:18-3:24、③ 4:1-5:12) は、テキスト内容の自然な区分に沿っている点で、大枠でのコンセンサスと言える。
- (19) Rudolf Bultmann, *Die drei Johannesbriefe* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967): 24.
- (20) David E. Aune, "Oral Tradition and the Aphorisms of Jesus," in *Jesus and the Oral Gospel Tradition*, ed. by Henry Wansbrough (JSNTSS 64; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991): 228-230; Richard Bauckham, *James: Wisdom of James, disciple of Jesus the sage* (London/New York: Routledge, 1999): 38-39.
- (21) Brown, *The Epistles of John*, 37. "No matter how one reacts to a source theory, one must somehow explain this pattern, which can scarcely be accidental." Brown の脚注 85 も参照 ("Those who reject the source theory could maintain that the author himself created the pattern, perhaps under the influence of the slogans of his opponents which he was trying to counteract with slogans of his

own”。Brown 自身は、資料説を否定し、スローガン説を採用している (42)。

- (22) 編集史批評の立場にあっても、Schnackenburg と Haenchen は当初から「資料説」に関しては懐疑的であり、I ヨハネの対句表現などについては、「文体的な装置 (Stylistic device)」と名付け、I ヨハネ特有のレトリック用法の一種として解釈した (Schnackenburg 1992:7-8; Haenchen “Neuere Literatur zu den Johannesbriefen,” *TRuNS* 26 [1960] 268-291)。これは、のちのレトリック批評の先駆けともなる解釈として再評価されるべきであろう。
- (23) Hans-Josef Klauck, *Ancient Letters and the New Testament: A Guide to Context and Exegesis* [English version] (Waco, Texas: Baylor University Press, 2006): 344.
- (24) Aune, “Oral Tradition and the Aphorisms of Jesus,” 232; Bauckham, *James*, 40.
- (25) 脚注 18 を参照。
- (26) I ヨハネの背景に、典型的なユダヤ教黙示思想と終末論が流れていることは明らかである。18a 節が、一般的な終末論的な「終わりの時」について述べているのに対して (「反キリスト (単数) が来る」 ἀντίχριστος ἔρχεται)、18b-19 節では共同体を離反したメンバー (複数) を指示している (「彼らは出て行った」 ἐξ ἡμῶν ἐξῆλθαν)。Cf. Lieu, *Theology of the Johannine Epistles*, 13, 101-103; eadem, “Authority to Become Children of God: A Study of 1 John,” 215-216. Cf. Perkins, *The Johannine Epistles*, xxiii; Hansjörg Schmid, “How to Read the First Epistle of John Non-Polemically,” 34-36.
- (27) それでもおそらく、キリストの人間性に関わる問題であったことが窺える。Klauck, *Der erste Johannesbrief*, 232-233; Judith Lieu, *I, II, & III John: A Commentary* (London/Louisville: Westminster John Knox Press, 2008): 167-170.
- (28) Judith M. Lieu, “Us or You? Persuasion and Identity in 1 John,” *JBL* 127 (2008): 805-819.
- (29) I ヨハネでのヘブライ語聖書への言及は、唯一この「カイン」だけであるが、「兄弟を殺した」人類最初の殺人者が、「兄弟のために生命を捨てた」イエスと対比されていると言える。
- (30) I ヨハ 4:17 は例外的な用例。
- (31) 3:16 (ἐγνώκαμεν); 3:19 (γινώσμεθα); 4:2 (γινώσκετε)。
- (32) ただし、「これによって」の「これ」が何を指示しているかについては解釈上非常に問題を孕む文章もある。「これ」が「後方照応 (cataphora)」[「これ」に続くセンテンスの内容を指す場合]であるのか、あるいは「前方照応 (anaphora)」[「これ」よりも前のセンテンスの内容を指す場合]であるのか、その都度判断しなければならない (Brown は、この問題を I ヨハネの「難問」としている。Brown 1982: 248)。
- (33) Klauck, *Der erste Johannesbrief*, 114-115.
- (34) Robert Law, *The Test of Life: A Study of the First Epistle of John*, 3rd edition

- (Ada, MI: Baker House, 1980 [1968]). Original: *The Tests of Life: A Study of the First Epistle of St. John, Being The Kerr Lectures for 1909* (Edinburgh: T&T Clark, 1909).
- (35) Law, *The Tests of Life*, 78; Bultmann, *Die drei Johannesbriefe*, 24; Brown, *The Epistles of John*, 249-250; Schnackenburg, *Die Johannesbriefe*, 87-88; Painter, *1, 2, and 3 John*, 165-166.
- (36) Lieu, "Authority to Become Children of God," 223-224.
- (37) 本稿では取り挙げないが、「聞く」・「聞いている」という動詞も、I ヨハネでは「共通理解事項」を再確認する文章に用いられている (I ヨハ 1:1, 3, 5//2:7, 18, 24 [x2]; 3:11; 4:3)。これは「定型句表現」とは言えないが、「初めから聞いていること」(1:1)を敷衍する形で繰り返し用いられている。「知る」と共に、「聞く」も同じように「共通理解した事柄」を想起させる機能を果たしていると思われる。
- (38) Malherbe, "Hellenistic Moralists and the New Testament," 696.
- (39) 最初の定型句表現でも触れた通り、ὁ λέγων ὅτι (2:4, 6) は「掟を守らない者」について述べ、2:3, 5 は「掟を守る者」について述べている。
- (40) Also, μένω in I Jn: 2:24 [x3], 27 [x2]; 3:6, 9, 14, 15, 17, 24 [x2]; 4:12, 13, 15, 16 [x3].
- (41) I ヨハネにおいては、「あの方」(ἐκεῖνος) は、キリストを指示している。
- (42) 「肉のうちに来る」(4:2) には、キリストの受肉・受難・死・帰還という、この世でのすべてのミッション行程を含む視点が盛り込まれているが (Klauck、大貫)、I ヨハネの場合、人々の罪を贖う「(贖罪)死」に特に重点が置かれている。
- (43) 「ヨハネ的相互内在」については、以下を参照。Schnackenburg, *Die Johannesbriefe*, 91.
- (44) 「コンマ・ヨハンネウム (Comma Johanneum 「ヨハネ節」)」(I ヨハ 5:7-8) の問題箇所も含む。
- (45) Haenchen "Neuene Literatur zu den Johannesbriefen," 269.